

認知機能低下を呈し、自宅での活動が制限されていた症例
～弱視である妻の介助量を考慮した上で、
ポータブルトイレ見守りの獲得に向けた取り組み～

誠和会 倉敷記念病院リハビリテーション部

山本一貴

【はじめに】

排泄に関連した不潔行為は、特に在宅介護において対応が困難な症状であり、「施設入所」を考えるひとつのきっかけになるとも言われている¹⁾。今回、認知機能低下を呈し、在宅で不潔行為のみられる利用者において、弱視である妻の介助量を考慮した上で、ポータブルトイレ（以下：Pトイレ）見守りの獲得を目指した症例を報告する。

【症例紹介】

70歳代男性。要介護3。キーパーソンである妻が転倒し、肋骨骨折の診断にてA病院へ入院した。介護者不在時の利用により、Y日に当法人の老人保健施設へ入所した。既往歴は、脳血管性パーキンソンニズム、心原性脳塞栓症、慢性心不全、心房細動があった。病前の生活として、弱視である妻と2人暮らし。デイサービスとヘルパーを3回/週ずつ利用していたが、自宅では終日オムツを着用しており、ベッド上生活が主により活動量の低下を認めた。長谷川式簡易知能評価スケール（以下：HDS-R）は17/30点と認知機能低下を認め、病前では、尿便意への訴えもなく便いじりがあった。基本動作として、起居動作中等度介助であり、起立動作は、上肢の引き込み現象を認め、L字柵にて軽介助を要した。移乗動作軽介助であり、トイレ動作は、L字柵支持にて立位保持は可能だが、下衣操作とパット交換全介助、後処理では準備・声掛けを要した。

【治療・経過】

治療は、起居動作、起立動作、移乗動作の反復練習、立位の静的・動的バランス練習、下衣操作模擬練習を行った。極力排泄動作の失敗を少なくするため、支持物下での動作練習に加え、把持する位置を視覚的に限定した。また、Y+10日よりPトイレを設置し、トイレ誘導の習慣化を促した。Y+59日（最終PTex.）では、不潔行為は消失した。起居動作は、修正自立へ改善した。起立動作は、上肢の引き込み現象が消失し、L字柵にて見守りへ改善した。移乗動作は、見守りへ改善した。トイレ動作は、片手で立位保持が可能となり、手順の声掛けで片手での下

衣操作が見守りで可能となった。しかし、パット交換に介助を要した。また、認知機能の低下から両手を離すことがあり、後方へ傾倒する場面も見られるため、トイレ動作の見守りは必要であった。妻とヘルパーの介護力について、トイレ動作での近位監視、パット交換は妻も可能であり、Pトイレの処理は、ヘルパーが行った。

【考察】

本症例は活動量の低下により、起居や起立動作といった基本動作が低頻度であった。誤りを最小限にした学習療法は、認知症患者における前頭葉機能の維持改善や日常生活動作能力の維持に有効なことが明らかとなっている²⁾。今回、認知機能低下を呈し、元々の活動量が少ない本症例にとって、支持物を把持し、尚且つ、視覚的に把持する場所を限定する事で失敗の少ない反復練習が行え、基本動作の定着が図れた。よって、弱視の妻が可能な介助量軽減に至ることができた。

【参考文献】

- 1) 武地一，山田裕子，他：もの忘れ外来通院中のアルツハイマー型痴呆症患者における行動・心理学的症候と認知機能，介護負担感の関連について．日老医誌 2006; 43: 207—216.
- 2) Kawashim R, Okita K, etal: Reading aloud and arithmetic calculation improve frontal function of people with dementia. J Gerontol A Biol Sci Med Sci 60:380-384, 2005.